

新害虫ネギネクロバネキノコバエの生態と防除対策について

1 はじめに

2014 年秋に埼玉県北部のネギは場で、これまで国内で発生していなかった害虫「ネギネクロバネキノコバエ」（以下「ネギネ」）の被害が確認されました。ネギネによる被害はネギだけでなくニンジンにもおよび産地で大きな問題となっています。

国内未発生の新害虫で、その生態や防除対策がまったくわからない状況であったことから、2016 年に本県と国、大学による共同研究がスタートしました。研究によりその生態や防除対策を明らかにしたことにより、現在では大きな被害はみられなくなりました。そこで今回、新害虫ネギネの生態や防除対策についてご紹介します。



写真 ネギを食害するネギネ幼虫

2 生態

ネギネは卵から幼虫、蛹を経て約 4 週間で成虫となります。幼虫は黒い頭部と半透明の棒状の腹部をもち、大きいもので 4 mm 程度となります。地下部に生息し、ネギやニンジンなどの地下部を食害します。成虫は黒い蚊のような形をしていて食害はせず地上で活動しますが、あまり飛び回らず主に地表面に生息しています。12 月以降になると寒さにより成虫は見られなくなりますが、幼虫が地下部で冬を越し、3 月中旬以降になると新たな成虫がみられます。



写真 ネギネ成虫（左：メス、右：オス）
体長 約2～3mm

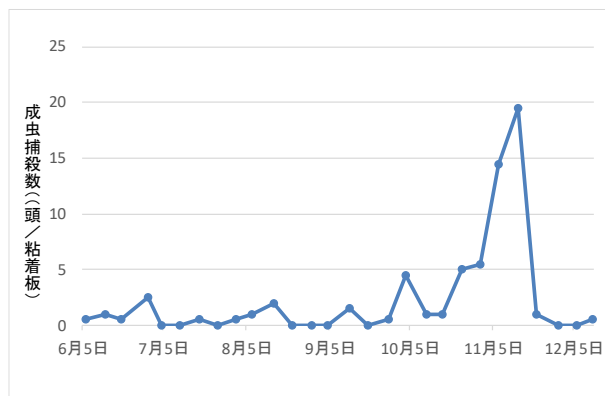


図 黄色粘着板によるネギネ成虫の発生状況
(ネギほ場 2018年6月～12月)

3 防除対策

実験室やほ場でネギネに対する農薬の効果について試験を行い、現在ではネギで5剤、ニンジンで2剤が農薬登録され使用できるようになりました。ネギでは、定植からネギネ成虫の活動が終了となる12月中旬まで、これらの農薬を定期的を使用することで被害を大きく減らすことが出来ます。しかし、8月以降に軟白を作るための土寄せ作業が行われ、幼虫の生息する場所が深く(約30cm)なり農薬が届かなくなるため、それまでにしっかりと防除を行うことが重要です。

また、ネギを出荷調整する際に生じる根や皮(葉)、ほ場の残さはネギネの発生源となるため焼却などの対策も重要です。さらに農薬以外の防除対策についても、引き続き研究を進めています。



写真 農薬試験中のネギほ場

【問い合わせ先】

埼玉県農業技術研究センター 病害虫研究担当

電話：048-536-0311 (代表) FAX：048-536-0315 (代表)

埼玉県農業技術研究センターホームページ <http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/b0909/>